

第4 課題別集会

公民館と地域を結び付ける地域学習

討議内容 公民館の置かれた環境は厳しくなっています。利用者の要望や課題は多様化しています。時代の変化に対応できる柔軟な発想と、自由な取り組みを考えます。

助言者 倉持伸江(東京学芸大学准教授)
事例報告者 石田裕子(西東京市公民館運営審議会会長)
松永尚江(西東京市田無公民館専門員)
石毛和夫(熊川分水に親しむ会会長代行)
遠藤弘文(昭島市公民館職員)
司会者 白崎好邦(町田市・委員部会副部会長)
企画・運営者 都公連委員部会運営委員

事例報告1

「公民館の学びがまちをつくる」

事例報告者：石田裕子（西東京市公民館運営審議会委員長）
松永尚江（西東京市公民館専門員）

1. 平成26年度の公民館講座の企画について

地域課題の解決のための学びを市民に提供する。（西東京市は貧困率が多摩地域の中で6位と高い）

（1）地域課題である「子どもの貧困」をただ知識として学習するのではなく、地域の大人として自分たちに何ができるかを具体的に考え合う講座としました。

田無公民館主催社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」全5回（定員20名に対し41名の応募があり、抽選の結果26名参加で15名が抽選漏れとなりました。



2. 講座参加者をつなげる

（1）グループ討議の機会を多く持ち、参加者同士の連帯感を深めました。講師は西東京市内の現場で活躍中の方を中心にしました。養護施設の設長、児童館運営の委託NPO（西東京子どもアミーゴ）、無料学習支援団体（稲門寺子屋）、ニートひきこもり対策事業委託NPO（文化学習協働ネットワーク）、西東京市生活福祉課主幹、しんぐるまざーすふぉーらむ代表などです。

参加者は毎回感想をカードにその都度感想を記入し、それを次の会に無記名で全員に配布し感想を共有しました。他の参加者の想いや、どんなことをやりたいと思っているかを見える化しました。

3. 5回の講座終了後、サークル立ち上がりを支援

(1) 2回の事後の会を通じて、参加者たちがサークル「西東京わいわいネット」を立ち上げることが決まり、平成 27 年 3 月その活動の柱を「食事の提供」と「学習」「市内の子ども関係の団体と連携」に置きました。平成 27 年度公民館主催講座「月 I T H I クッキング」で、西東京わいわいネットの共催で、年 7 回「わいわいクッキング」を展開しました。「わいわいクッキング」を展開しながら、サークルメンバーが自分の住む地域に「子ども食堂」を作り始めました。

4. 講座パート 2 の開催

サークルメンバーが活発に動く中、更に学習の必要性を感じ「子ども食堂」の草分けである「豊島わくわくネットワーク」の栗林知絵子氏等が展開するプレーパークの見学などを盛り込んだ講座を開催しました。

田無市公民館主催社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」パート 2 全 5 回を平成 27 年 10 月～12 月に開催し、パート 2 からの参加の受講生が新たな「子ども食堂」を地域に展開しました。(木々、放課後キッチンごろごろ、しばくぼーの) 等です。平成 28 年度は田無公民館主催「わいわいクッキング」を西東京わいわいネットと共催で年間 12 回開催し、学生ボランティア(固定メンバーは少ない)も毎回参加してくれました。

西東京わいわいネットは「西東京市市民企画事業」を活用し「子どもの貧困・格差社会」について考える企画を展開しました。

子ども食堂「未来」、飯もり山、柳沢子ども食堂等子ども食堂もさらに増えました。

5. 学習支援を開始(平成 29 年度)

平成 29 年度は、公民館からサークル「西東京わいわいネット」がひとり立ちして自主的に「わいわいクッキング」を展開しています。

学生の参加も目立ってきたことから、学生の協力を得て学習支援も始まりました。こうした中、市内の大学「武蔵野大学」の学生 9 名が「子どもの居場所」をテーマに「西東京わいわいネット」の取材をもとに卒論「9つの視点から」を作成しました。

田無公民館主催講座「このまちに子どもの居場所をつくるために」全 6 回(定員 25 名に 38 名の応募があり全員参加とした)を平成 30 年 1 月 6 日から開催しました。不登校などの子どもの居場所づくりのために学び合い、今後は居場所づくりにつなげていきたいと思います。

6. 学生子ども食堂の開始(平成 30 年度)

ボランティアで参加していた武蔵野大学の学生が「自分たちで子ども食堂と学習支援

を展開したのだが・・・」と公民館に相談に訪れました。田無公民館との共催で「学生子ども食堂」を4月から月1回展開することになりました。

終わりに

「公民館の自由な学び」は無限の可能性と広がりを含んでいます。市民や学生たちのやる気や良心を引き出す事業の企画が今後、更に期待されます。

事例報告 2

福生市公民館と「熊川分水に親しむ会」の活動

報告者：石毛和夫（熊川分水に親しむ会会長代行）

熊川分水に親しむ会は、平成16年（2004年）に福生市公民館（白梅分館）で行われた講座を契機に生まれた団体です。これまで公民館（白梅分館）と協力して地域の歴史・環境財産である「熊川分水」に関する情報収集と発信、保全啓発活動を行ってきました。公民館協働の経緯と現状について報告します。

1. 熊川分水について

承応2年（1653年）急速に発展する江戸の水問題を解決するために玉川上水には、その後、多くの分水がつくられて新田開発などに活用されてきました。明治期なり熊川村で造り酒屋の酒造精米用水車の動力源として、森田製糸場も絹輸出の興隆とともに製糸用水の必要を感じていました。明治23年（1890年）全長約2kmの熊川分水を完成させました。この分水は上記の産業用水だけでなく熊川村民の生活用水（飲料、洗い物、農作業等）にも使われてきました。しかしほどなく産業用水としての必要性は低下し、昭和30年代には上水道が各戸に行きわたって生活用水としての分水の役割も終了しました。開削当初すでに百数十戸が存在していた村に分水を通したため、今も大部分は民地を通っています。現在、分水は暗渠化が進んでいるが、開渠部には開削当時の工法である「空石積み」が現在も残っているところも多いです。



2. 福生市行政における「熊川分水」の位置づけ

都市計画マスタープランや緑の基本計画、環境基本計画、まちづくり景観基本計画で、熊川上水は、取り上げられています。

3. 熊川分水に親しむ会

平成15年に福生市公民館（白梅分館）主催講座として連続講座「熊川分水再発見」が開催され、受講者は熊川分水に関する知識を得るとともに、分水が魅力的な地域の財産であることを知りました。平成16年2月に上記講座心に、熊川分水の保全に関心を持つメンバーが集まり「熊川分水を考える会」が発足しましたが、同年4月に現名称「熊川

分水に親しむ会」に改称しました。

本会の活動方針

- (1) 市民や子ども達が熊川分水に親しむ機会の提供
- (2) 熊川分水の保全
- (3) 地域の歴史や他の分水・用水路の勉強

4. 公民館との協働活動

- (1) 熊川分水に親しむ講座

毎年9月～10月に4回の連続講座を公民館が開催しています。内容は①熊川分水の歴史、②分水と人々の生活、③分水の自然環境の3回を座学で行い、最終回は④熊川分水を歩く、という現地ウォーキングを実施して座学で得た知識を確認するという構成になっています。講師は本会の会員が務めることになっているが、毎年同じテーマでも内容に変化をもたらすため苦勞しています。

- (2) 熊川分水たんけん隊

公民館は夏休みの一日「森田製糸場跡地」を借りて開放し「熊川分水夏休みたんけん隊」を実施しており、本会とNPO法人自然環境アカデミーが協力しています。

子ども達（大人も）は熊川分水に入って魚や小動物をとり製糸場跡地の草原で昆虫を採って過ごしたあと、本会会員である講師から採取した動物について説明を受ける構成の行事です。魚や虫は説明会終了後に分水と草原に戻しています。

- (3) 白梅まつり

白梅分館では年一回、公民館（分館）利用者が活動成果を発表展示する催しを開催しています。本会も、会の活動や調査結果の展示を行って熊川分水に関する情報発信を行っています。この展示で一方的に発信するだけでなく、来場者からも新しい情報が得られる貴重な機会となっています。

- (4) 熊川地域の歴史掘り起し

歴史学習会を開催し、熊川村で育ったお年寄りから昭和初期の熊川分水、熊川村の様子を聞き冊子にまとめました。聞き取り内容は、分水、熊川神社、森田製糸場、かつて賑わっていた商店街などに及び、その記憶をもとに商店の位置を確認して昭和初期の熊川銀座商店街図を作成しました。成果は冊子「語り継ぐ熊川村・熊川分水の歴史 歴史学習の記録と古老からの聞き書き」となりました。

5. 地域との共同活動など

小中学校の生活たんけん授業、まちの宝さがし授業で熊川分水周辺の観察を補助し質問に答えるなどの支援を随時行っています。

また、福生市観光案内所「くるみふっさ」が主催する分水案内ツアーには市外参加者が多く熊川分水や熊川の歴史PRの貴重な機会として、本会の会員がガイドを務めています。

また、会の活動として各地の用水路や湧水など水環境資源の視察見学を実施して熊川分水保全活動の参考とすべく学習を行っています。

6. 市との協働への波及

福生市の水辺環境整備の一環として南公園の一面にビオトープつくられたが、渇水時の補水対策として熊川分水流末部から水を廻してビオトープが枯れないような工事を要望し実現しました。

江戸時代熊川村は水不足に悩んでいたが、村を知行した旗本（長塩氏）が村民に与えたと伝えられる井戸が一つだけ現存します。歴史学習材料として活用できるよう井戸の体裁を復元（明治時代のスケッチに残された釣瓶を模して再現）しました。

民地内の分水も「福生市まちづくり景観条例」に定める「景観重要資源」に指定されることで、改修に対して市の技術的・資金的支援が得られる制度の活用を検討してほしい旨を市に要望していたが、平成 29 年 9 月に分水の 9 か所が景観重要資源に指定されました。指定箇所の総延長は、449m（分水全長の 22%）開渠部の約 40%が該当します。

まとめ

地域の歴史・景観財産である熊川分水を残していきたいというメンバーで構成された「熊川分水の親しむ会」の地域活動について、公民館との関わりを中心に述べました。

- （１）公民館講座が契機となって会ができました。
- （２）公民館と協働することで継続的な活動が可能となりました。
- （３）地域に密着することで、分水や熊川村に関する知見が深められ蓄積できました。
- （４）地域の要望として分水の重要性を市（行政）にアピールでき、分水の保全支援策に結びつきました。

事例報告 3

小学校との連携事業「学校の総合的な学習の時間の活用」

報告者：遠藤弘文（昭島市公民館職員）

今回紹介する小学校との連携事業は、前公民館運営審議会への諮問「市民が集う公民館事業のあり方」から始まり、答申を受けたもので、公民館運営審議会委員である小学校長の協力により、平成 29 年 1 月・3 月にかけて開催し連携事業として最初の一步を踏み出した事業です。

1. 小学校との連携「学校の総合的な学習の時間」を活用する企画の実施

小学校の教育に公民館を取り上げていただき、子どもの時から公民館に関心を持ち、地域で活躍する素地を育てます。

（１）小学 3 年生

①見学・インタビュー

小学 3 年生の社会科で「わたしたちの昭島市」に公共施設の一つとして公民館を取

り上げました。見学、インタビューでどんな施設か、どんな人が働いているのか、どのように利用しているのか調べ、その後、館内及び当日活動している団体（折り紙、陶芸等）を見学しました。

（２）小学６年生

①見学・インタビュー

小学６年生の総合的な学習の時間「まちづくりプロジェクト」で公民館を軸にしたまちづくりを考えました。地域を見直し、課題をもとに自分たちでできることを考えました。また、公民館を利用する人たちと交流を深めました。３クラスが２日間に渡り来館し、どんな利用者がいるのか、館の使い方、小学生に何ができるか、職員の思い等の質問があり、回答後は当日の団体活動（ダンス、囲碁、合唱、大正琴、ヨガ、英会話等）を体験しました。

②発表会の開催

地域の人との関わりをとoshi地域の良さや課題を見出し、これからのまちづくりに向け自分にできることを考えることをねらいとし、自治会・子ども会・花の会・読み聞かせ・あいさつ・地域との関わりの６つのグループに別れ、公民館で発表しました。発表会当日は、自治会・子ども会・団地の管理組合・地域見守り隊・家族等の方々が来館され、子どもたちより感謝の手紙の発表があり、地域の絆が深まりました。

３．事業を終えての課題

- （１）今回は、公民館に一番近い小学校ということもあり実現したが、市内には他に 13 校あり、離れた学校は実現が難しい。学習共用施設として市立会館を利用し他の小学校とも連携を図っていきたいと思います。
- （２）公民館の関わりは会場確保と活動団体との調整だけでしたので、次年度以降は、企画にも絡んでいきたいと思います。
- （３）体験活動に協力していただいた団体を含め、公民館活動をしている団体を地域に還元できるネットワークを構築していきたい。
- （４）小学生が参加できる事業を拡充していきます。

助言者論点整理

東京学芸大学に就職し、すぐに国分寺市のもとまち公民館（当時は５館それぞれに公運審が配置されていた）で公運審をさせていただき、議論したり、活動を作り出していく中で、公民館の必要性、公民館運営審議会委員としかの力を学び、現在は立川市や西東京市で関わらせていただいています。社会教育の専門と言いながらも、公民館活動を通じて、公民館の良さ、大切さを体感して来たと思います。皆さんも市民として職員として、公民館が必要、大事な活動をしていると思い、社会教育の意味を感じていると思います。一方、公民館が流行っていると言えるでしょうか。皆さんと私は、良さや意義

を実感していると思います。今日、伺った3つの事例は、それぞれ公民館があったからこそ活動が始まり展開していると思います。これからの社会教育は、館に閉じこもって
いてはだめ、仲間とだけでもだめ、他の団体と連携し価値をより広げていくことが大事
だと言われています。3市の事例はそれが具体的になった例だと思います。

西東京市の事例は「何が出来るか、具体的に考え合わなければいけない」もはや行動
をアクションを作っていくために何をしなければいけないかを学びつつ、皆さんが今取
り組んでいる課題から少しヒントを見つけていきたいと思います。3つの事例の中でも
実際にやってみると困難もたくさんあり、やりながら考え、作っていくことが多いにあ
る気がします。西東京市になぜ子ども食堂が広がり、公民館だからこそ広がって行っ
たのかいくつかの要因があると思います。

福生市の環境活動に広がる中味も、西東京市もそうだが講座がきっかけで、自立した
活動を発展させながら、しかも手を組む相手は公民館だけでなく、市民グループや必要
に応じて社協、学校、行政の他の部署等とつながり、それをまた公民館に持ち込んでい
ます。公民館だけでは実現しなかったかもしれない事を市民の目線で自由に行動し、そ
れをまた公民館とのつながりをもたらし、公民館のふところの深さもありました。

昭島の事例は、公民館運営審議会委員に校長先生がいたきっかけで、今回は学校が中
心にプログラムを組んで企画しが、それを受け止めきれぬ公民館と利用者グループが、
それをどうつなげて発展させていくか私たちが学べる所は多いにあると思います。

また、地域課題解決が大切です。みなさん自身の実際の取り組みの中から、これから
やろうとしている事、やろうとしたが上手くいかなかった事等から地域の困り事とつな
げつつ発展させていくという目線があるのか、情報交換していただけたらと思います

後半のグループ討議では何をすべきか考えていただいて、心おきなく議論し合い話し
合いたくさんの事を持帰っていただきたいと思います。

グループ討議

7つのグループに分かれて、事例報告の感想や各市の課題について意見交換をしました。

グループ発表

Aグループ

公民館の魅力が「使っていない、来館しない」人に届いていない。公民館からの情報発信
が重要です。個を得意とする社協と、面を得意と
する公民館それぞれの良さを連携で補完したら
と思います。地域学習には、地域の団体との協力が
必要です。公民館職員のコーディネート力で団
体と市民を結び付けることができます。

Bグループ



人との触れ合いが大切です。ロビー、レストラン、読書コーナー等、人の集まる場所として活用したい。新しい利用者を増やすには、職員に頼るのではなく、自分たちでできる事があるはずです。公民館からわかりやすい情報発信をしたいです。「来なければ何も分からない」から脱却したい。事例) スマホ操作のサロンを開設しています。教育ネットワークを作る講座を実施しました。独居で孤立しないよう公民館で関われないですか。

Cグループ

公民館だよりは内容が良くても、読んでもらえていません。もう一工夫が必要です。公民館の良さを人から人へ口コミで広げるのが良いと思います。人の繋がりが大事です。若い人に関心を持ってもらうのが課題ですが、保育付きの「子育て講座」でも集客は少ないです。講座案(外国人向けの交流講座、有名人による講演会、地域の高齢者の昔話、新住民向けのまち歩き講座、各種出前講座)が考えられます。

Dグループ

国分寺市では地域協議会がうまく機能しています。地域の各団体が協力して運動会等いろいろな取組がなされています。中学生の職場体験から出た意見を企画に活かして公民館祭りで発表しました。子ども食堂に関連して、フードロス運動で、地域の各種団体、企業と協力していきたいと思います。

Eグループ

利用者の高齢化、固定化が見られます。若い世代は地域との繋がりが薄く、新しい利用者はなかなか増えません。母子家庭が多く、貧困化が進み子ども食堂のニーズは高まっています。

すでに実施している市もありますが、運営上の課題も出てきています。地域と繋がりを作るのは、職員のコーディネート力によります。公運審は地域と繋がっているそれぞれの立場から力を発揮して下さい。

Fグループ

学校教育と社会教育は馴染みにくいのか連携を申し入れても、断られる事が多い。小学生の時から公民館に関心を持ってもらう、きっかけ作りが必要です。近隣の高校の部活と連携し小学生に参加してもらう。子どもサークルの発表の場を提供する。職場体験で公民館に来てもらう等が考えられます。

Gグループ

地域の力を学校で活かすのに、利用団体による学級支援があります。家庭科での裁縫や料理の手伝いです。中学校区に一館あると連携が取りやすいですが、忙しい学校は外部との協力をわずらわしく感じる面もあります。学校関係者に公運審に入って貰い協力してもらいたいと思います。

助言者まとめ

それぞれ最初の問題意識を共有出来たと思います。それぞれがいろいろな地域の実況を話し合ったにもかかわらず、最後の報告を聞きわりと共通するような課題があり、それぞれ条件は違いますが、似たような関心や課題が出てきたのではないかと、あらためて確認できたと思います。今日は地域と公民館を結びつける、地域学習を考えるという事です。そもそも地域の学習拠点である公民館という館は、地域の学びにどう結び付き、1人ひとりの人生を豊かにしていくことです。しかし、多様化する現代社会の中で、地域ということ事態がつかみづらく捉えづらくなっている中で、こういった公民館が現代



社会に適したあり方なのかあらためて考えさせられました。今回の事例もそうですが、グループ討議の内容もまず地域課題ということを手練りで徹底するのか、これは「職員さんガンバレ」という所につながるのかも知れませんが、地域課題はふとした会話の中に課題が潜んでいたり、実は個人的に悩んで相談された事であり、地域の課題ということは多くの人が悩んでいるのではなく、見つけるレーダーや課題を出し合う場

など、身近な所に有るのではないのでしょうか。そう考えると様々な立場の人がいる公民館運営審議の会議が重要だと思います。それぞれの立場で、生活者、地元の住民、利用者として課題を出し合い共有することや地域の課題について学ぶことも必要なのではないのでしょうか。地域学習とは知る事と実際に行動し解決につなげられることが境界線なくつながっているもので、学び方や学びの構成の仕方等の工夫が必要です。

講師に地元のことを良く知る実践者の人や当事者、経験者をうまく取り組んでいくことは、実際に学んだ人が次に何かをしたい時に直ぐに顔が分かるといったこともあります。一般論として子どもの貧困を知るのではなく、実際、西東京市でどういうことに苦勞し、どういう事をやろうとしているのかを知ることが、学びが行動につながるひとつのヒントがあると思います。学び方も、話し合い学習や見学・体験があると思います。アクティブかつ交流のある方法が、学習に有効的だと思いました。それは講義がいらなく、必要に効果的に組み合わせられているのだと思いました。また、どういう人にスタッフになってもらうか、巻き込み具合、多分皆さんやっているとありますが、「今度こういう講義があるからチョット出て見てよ」といったことが、その後の活動を行う時に核になっていくと思います。事前に仕込むことや来た人を探ることもあると思いますが、来てもらうことはただ待つのではないということです。それから講座後で自立した自主的グループが、ゆるやかにつながり必要な時に手を取り合っていく距離感やゆるやかさ等も必要だと思いました。そこから地域学習が自立的に発展し、住民たちの学習グループになって行きます。しかし、その学びや学習を閉じていないという事が非常に重要で

あり、閉じないことが公民館の役割があると思います。公民館と一緒に講座を企画し記録として残すことや広報に載せること、おまつりで発表すること等、学習の過程成果にその学習をコアでやっています。中心でやってない人達は、たまに来る人やちょっと関心を持っている人で、他の人の目に触れるようになっています。そういったことも大事であり、途中で参加した人や、やはりやりたい人、暇だった人と等が介入できるような公民館が作ることです。予想外の反応や成果も見逃さないことが大事だと思います。やってみて分かることはたくさんありますが、行動しながらやって行くことが大事です。こういった事を実現していくためには、先程Eグループから出ていましたが、職員がコーディネーター的専門性とセンスと役割をはっきりすることが重要になってきます。

一方で公民館運営審議会委員が動く委員になって行くことも重要です。難しい顔している人がいますがやはり口だけ出すのではなく、手も足も動かし、その反応を公民館運営審議会に持帰ることも重要だと感じます。私自身も公民館運営審議会委員の学識で会議に参加すれば良いかなと思っていたら全然そんな事はなく、いろいろと振られます。私の公民館運営審議会委員経験10年はそういう感じでした。それが1回始めると辞められなくなり、私にとっても学生にとっても学びになっています。公民館にも何か還元出来ているかと思います。行動する公民館運営審議会委員を目指さなければいけないと、自身に跳ね返ってくるのは分かっています。やってみることはすごく大きいことです。

広報の大切さやどう広げていくかを議論も出ましたが共通する課題として、若い世代、子供、働いている若い世代、子育て中の人といった、若い世代をどう取り込んでいくか今日の課題としてあります。若い世代が比較的多く集まっている大学で働いている私からするとヒントもたくさん得られたと思います。大学や学校側は自分達の教育活動があり、その教育活動に噛み合えば、連携、共働をしていきたいと思っています。地域や公民館側の理屈や要望だけでは無理がありますが、自分達の仕事も活きつつ、公民館にも位置付くような連携があれば、どんどんできると思います。私たちはたまたま社会教育の担当ですが、学生が地域に出て行き共同して何か企画運営することは、社会教育の学びになることです。学生達も社会教育の現場で学ぶことは、大学で学ぶだけではなく、実践力が付くので、すごくこれはありがたいことです。それが就職活動に結び付くのに役立ち若者の成長にもつながると思います。それは小学校、中学校、高校も同じです。2020年から社会教育は実習が必要になります。社会教育の養成校は増々現場とどのように結びつけようかと大学も求めて来ます。これから大学の学部があらたに新設され、街づくり、地域づくり、福祉を学ぶこと等、どんな学問領域でも現場で体験する事を求めています。高校生はボランティア活動が進路の時、評価されどこでボランティアをやろうか探したりしています。うまくそういったものと組み合わせれば若い世代と連携することも可能ではないかと思いますので、今後、また、お互いの知恵やヒントを持ち寄っていかれたらと思います。